

平成22年度

ヒメバラモミ保護管理調査事業
報告書

平成22年10月

中部森林管理局

はじめに

当協会が受託したヒメバラモミ保護管理調査事業は、本年5月初旬の八ヶ岳西岳国有林への遺伝資源林の造成及び8月下旬の生育調査を以って終了しました。

当該事業は、平成16年度を初年度として、平成16年度には八ヶ岳地域のヒメバラモミの概況調査を、平成17年度は南アルプス地域で同様な調査を行いました。

その後接ぎ穂の採取を、平成18年度は八ヶ岳地域、平成19年度には南アルプス地域で行い、平成19年5月下旬に、当協会北海道江別苗畑で両地域の採穂を用いて接ぎ木を実施しました。

当初計画では、接ぎ木苗木の山出しは、接ぎ木後2生育期間を過ぎた平成21年の春期に行うこととしていましたが、苗木の上長伸長が思わしくなかったことから、山出し期間を1年間延長し、平成22年春期に行うこととしました。平成21年度は、接ぎ木後の生育期間が3年目でしたが、当年度の上長伸長は非常によく、過去2年間の合計伸長量と同程度伸長し、台木部分及び上長伸長部分も太く遅しく成長しました。また根系もよく発達しました。

平成22年度の遺伝資源林造成のための苗木山出し及び植栽は、当初4月下旬を予定していましたが、4月の接ぎ木苗床の積雪が例年に比較して多く、4月下旬の苗木掘り取りが困難であったことから、北海道での苗木掘り取り、梱包は5月1日、遺伝資源林への発送は5月2日及び植栽は5月6日としました。

遺伝資源林は、八ヶ岳西岳国有林に八ヶ岳地域遺伝資源林及び南アルプス地域遺伝資源林の両遺伝資源林を造成しました。八ヶ岳地域遺伝資源林は、西岳国有林1333林班1.18haに69個体372本を植栽し、南アルプス地域遺伝資源林は、西岳国有林1334林班1.16haに65個体372本を植栽しました。ほぼ計画通り植栽出来たと考えております。

苗木の掘り取り、梱包、発送から植栽については、健全な苗木の植栽を目的としてその期間の短縮と、遺伝資源林の個体配置図に沿った正確な苗木の植栽について、特に留意しました。

当該事業は、中部森林管理局が予算事情の厳しい中で、生物多様性確保についての極めて意欲的な観点から事業を実施されたわけですが、前例の無いこの様な事業に踏み切られた中部森林管理局の決断に敬意を表しますとともに、当該事業の実施という機会を与えていただきました当協会としましては、誠に有難く感謝申し上げます。

当該事業の実施に当たり、社団法人ゴルファーの緑化促進協力会には、長期間にわたり協賛をしていただきました。誠に有難う御座いました。

事業を実施するにあたり、事業の方向性等を検討していただくために、検討委員会等を設置して、多くの委員の方々のご意見を頂きながら事業を進めて参りました。

また、事業実施に当たっては、独立行政法人森林総合研究所勝木俊雄氏（現群落動態研究室主任研究員）、げんごろう工房代表田中智氏及び飯田市美術博物館客員研究員明石浩司氏には、大変お世話になりました。

さらに関係市町村その他関係の方々にも大変お世話になりました。

以上関係の方々に厚く御礼申し上げます。

これを契機に、多くの方々が樹木の絶滅危惧種の増殖・保存に関心を持たれ、これら事業が少しでも推進されることを期待致します。

平成 22 年 10 月

社団法人 林木育種協会
理事長 栄 花 茂

ヒメバラモミ保護管理調査事業検討委員会委員等

1 検討委員会委員

氏名	職位等	備考
明石浩司	飯田市美術博物館 客員研究員	
浅野一男	長野県植物研究会	
井出雄二	東京大学大学院農学生命科学研究科生圏システム学 専攻森圏管理学研究室 教授	
勝木俊雄	独立行政法人森林総合研究所群落動態研究室 主任研究員	
小山泰弘	長野県林業総合センター 研究員	
曾宮和夫	環境省箱根自然環境事務所 所長	
高橋 誠	独立行政法人森林総合研究所林木育種センター特性 評価研究室 室長	
田中 智	げんごろう工房 代表	
土田勝義	信州大学 名誉教授	
中山晶計	伊那市長谷総合支所 支所長	
西川浩己	山梨県森林総合研究所森林環境部 研究員	
山本千秋	(財) 林業科学技術振興所	座長
吉丸博志	独立行政法人森林総合研究所森林遺伝領域 領域長	
麻生直樹	(社) ゴルファーの緑化促進協力会 専務理事	
川野康朗	中部森林管理局 計画部長	

2 関係出席者

氏名	職位等	備考
井上隆裕	中部森林管理局指導普及課 課長	
元島清人	中部森林管理局指導普及課 生態系管理指導官	
谷澤恭子	中部森林管理局指導普及課 保護林係長	
野尻 靖	中部森林管理局南信森林管理署 業務第一課長	

3 事務局

氏名	職位等	備考
栄花 茂	(社) 林木育種協会 理事長	
真柴孝司	同上 相談役	
塩崎 實	同上 顧問	
工藤正憲	同上 専務理事	
石井正気	同上 参与	
佐々木洋	同上 主任研究員	

目 次

はじめに

ヒメバラモミ保護管理調査事業検討委員会委員等

第 I 写真（平成16年度～平成22年度）	1
I ヒメバラモミ自生地等の概要	3
II 八ヶ岳地域採穂作業	6
III 南アルプス地域採穂作業	16
IV 北海道江別市の当協会苗畑における接ぎ木作業等	24
V 遺伝資源林の造成	43
第 II 平成22年度ヒメバラモミ保護管理調査事業	49
I 事業の概要	49
1 事業実施の目的	49
2 事業実施期間	49
3 事業計画の概要	49
4 全体計画	50
5 本事業の企画・実行等	50
II 事業実施経過の概要	51
1 平成16年度	51
2 平成17年度	51
3 平成18年度	53
4 平成19年度	54
5 平成20年度	55
6 平成21年度	56

Ⅲ 平成22年度事業の実施状況	58
1 事業日程の変更	58
2 仮植苗木の掘り取り及び梱包	58
3 苗木の輸送	59
4 遺伝資源林の造成	59
5 遺伝資源林の生育調査の実施及び現地検討会の開催	73
6 各機関等へのヒメバラモミ苗木の提供	83
7 当協会の受託した事業の終了	84

第 I 写真（平成16年度～平成22年度）

- I ヒメバラモミ自生地等の概況
（図1・写真－1～4）
- II 八ヶ岳地域採穂作業
（写真－5～21）
- III 南アルプス地域採穂作業
（写真－22～32）
- IV 北海道江別市の当協会苗畑における接ぎ木作業等
（写真－33～70）
- V 遺伝資源林の造成
（写真－71～82）

I ヒメバラモミ自生地の概要

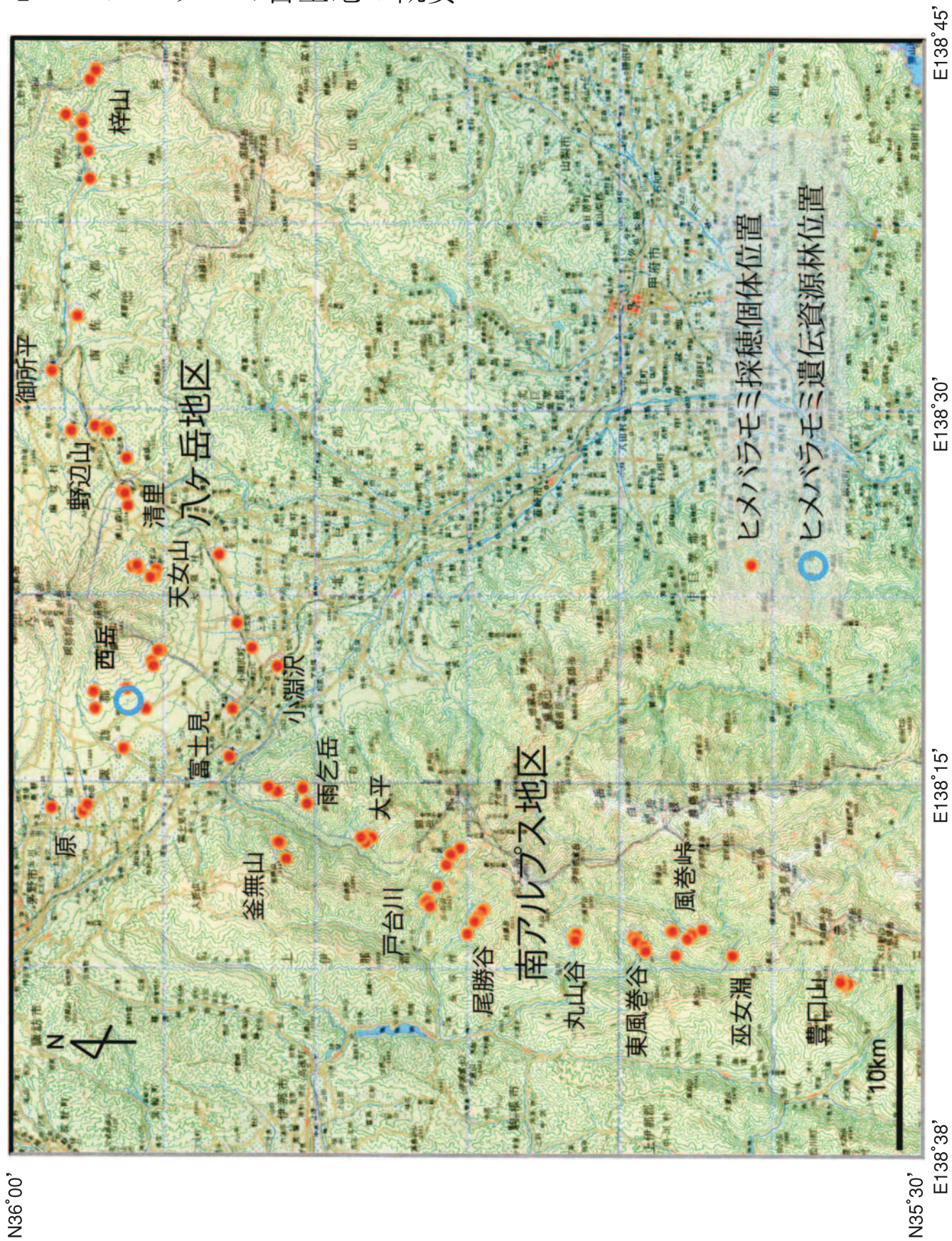


図1：ヒメバラモミ採穂個体位置及びヒメバラモミ遺伝資源林位置（勝木俊雄氏作成）



写真-1：ヒメバラモミの雌花
(2002年5月22日 富士見町西岳国有林)
(写真提供：勝木俊雄氏)



写真-2：ヒメバラモミの雄花
(2002年5月22日 富士見町西岳国有林)
(写真提供：勝木俊雄氏)



写真-3：ヒメバラモミの球果
(写真提供：勝木俊雄氏)



写真-4：ヒメバラモミの幼樹
(2002年6月24日 長谷村黒河内国有林)
(写真提供：勝木俊雄氏)

Ⅱ 八ヶ岳地域採穂作業



写真-5：カラマツ林内のヒメバラモミ
(富士見町釜無川左岸)
(写真提供：田中智氏)



写真-6：カラマツ林内のヒメバラモミ
(富士見町西岳国有林1334林班)



写真-7：広葉樹林内のヒメバラモミ
(川上村二ツ山)



写真-8：川上村伊勢社（神社）ヒメバラモミ
（御神木：長野県指定天然記念物）
（川上村樋沢：樹高42m、胸高直径136cm）



写真-9：写真-8に同じ



写真-10：井出沢誠氏自宅敷地内ヒメバラモミ防風林
(南牧村野辺山)



写真-11：財産区有林内のヒメバラモミ
(南牧村板橋財産区有林)



写真-12：民家敷地内のヒメバラモミ
(大泉村)



写真-13：民地のヒメバラモミ
(高根町：調布市少年自然の家)

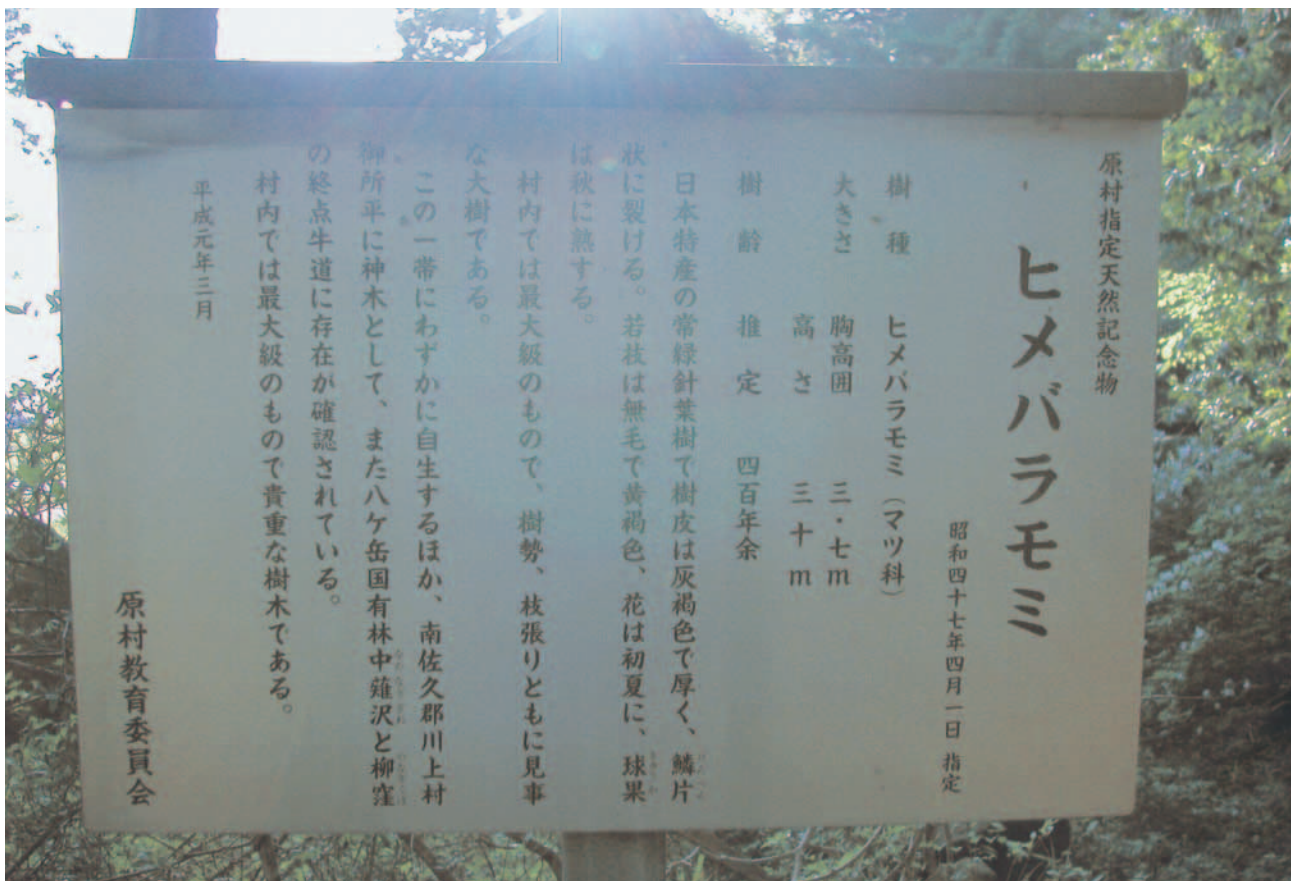


写真-14：ヒメバラモミ原村指定天然記念物標識
(原村隊龍遺跡)



写真-15：木登りによる穂木採取状況
(八ヶ岳地域：平成19年3月)



写真-16：カラマツ林内のヒメバラモミ
の穂木採取
(八ヶ岳地域：平成19年3月)



写真-17：採穂は、極力クローネの中層以上の日当たりのよい部位から、成長旺盛な小枝を採取する（八ヶ岳地域：平成19年3月）



写真-18：高枝切り鎌による採穂作業
（八ヶ岳地域：平成19年3月）



写真-19：採取した小枝の整枝作業
(八ヶ岳地域：平成19年3月)



写真-20：採取した小枝は、個体別に乾燥防止のミズゴケの入った袋に入れ、冷蔵庫で保管する
(八ヶ岳地域：平成19年3月)



写真-21：千曲川源流部 長野県川上村西沢（甲武信岳が源流の沢）
正面の高い山は梓白岩（標高1,853m）
この頂上に近い場所で、個体名「川上-1」より採穂
（写真提供：田中智氏）

Ⅲ 南アルプス地域採穂作業



写真-22：戸台川流域
戸台川流域は極めて急峻であり、ヒメバラモミの
小面積自生地が散在する。
後方に仙丈岳（標高3,032m）を望む



写真-23：伊那市長谷戸台川流域（黒河内国有林）
南アルプスは石灰地が南北に延び、岸壁やその下の崖錐にヒメバラモミが点在していることが多い（写真提供：明石浩司氏）



写真-24：伊那市長谷戸台川流域（黒河内国有林）

戸台川上流部では土石流が氾濫している。後部の山は南アルプスの稜線。土石流の氾濫原にはカラマツ高木林が広がり、ヒメバラモミも出現する。河原に近い場所にはヒメバラモミの若木もある（写真提供：明石浩司氏）



写真-25：伊那市長谷戸台川上流部（黒河内国有林270班ろ小班）
樹高の最大個体「端溪太郎」。樹高45.0m、胸高直径109.4cm。周囲にヒメバラモミはなく、また
突出した樹高から、まさに孤高の存在（写真提供：明石浩司氏）



写真-26：伊那市長谷東風巻谷（浦国有林18林班ろ小班）

自生木の胸高直径最大の個体「風巻三郎」。樹高38.2m、胸高直径130.8cm

見上げる限りどこまでも太い樹幹は圧倒的な威容をなし、大きく亀甲紋に割れた分厚い樹皮は老木の風格を十二分に醸し出している。

写真は、伊那市在住の飯田市美術博物館客員研究員の明石浩司氏が主催し、地元住民が参加するヒメバラモミ観察会の様子（写真提供：明石浩司氏）



写真-27：伊那市長谷東風巻谷（浦国有林18林班ろ小班）
東風巻谷の林相。周囲はカラマツ人工林だが、石灰の岸壁の周囲には天然林が残る。特にヒメバラモミ巨木群落は圧巻であるが、群落内には更新木はほとんどない（写真提供：明石浩司氏）



写真-28：伊那市長谷巫女淵～風巻峠（浦国有林）
風巻峠の東、三峰本流の河原。洪水氾濫の跡地に、ヒメバラモミがカラマツなどと一緒に先駆樹林として生育している（写真提供：明石浩司氏）



写真-29：大鹿村豊口山（大鹿村有林）

ヒメバラモミ南限の自生集団。ウラジロモミやブナ、シナノキなどによる極相林にヒメバラモミの大木が残る。今後更新できるか危惧される場所である（写真提供：明石浩司氏）



写真-30：北杜市白州町雨乞岳（山梨県有林）

なるべく南側にある成長の良い小枝を採取した